

学位論文審査結果の要旨

| | | | |
|---|---|-----|-------|
| 所 属 | 三重大学大学院医学系研究科 乙 生命医科学専攻病態修復医学講座 肝胆膵・移植外科学分野 | 氏 名 | 飯澤 祐介 |
| 審 査 委 員 | 主 査 楠 正人 副 査 吉田 利道 副 査 竹井 謙之 | | |
| <p>(学位論文審査結果の要旨)</p> <p>Long-term outcomes after pancreaticoduodenectomy using pair-watch suturing technique: Different roles of pancreatic duct dilatation and remnant pancreatic volume for the development of pancreatic endocrine and exocrine dysfunction</p> <p>【主論文審査結果の要旨】</p> <p>著者らは論文において下記の内容を述べている。</p> <p>膵頭十二指腸切除術 (PD)後の長期生存例は増加しており、このような症例では長期に渡り膵内外分泌機能不全を予防することは重要である。膵内外分泌機能の評価は PD 後の消化管再建法に大きく影響されるが、PD 後の再建法、特に膵再建法は施設によって様々であり、これが膵内外分泌機能の評価を困難としている一因である。著者の施設は、過去に pair-watch suturing technique (PWST) と名付けた標準化した膵空腸吻合の有用性を報告した。また、膵外分泌不全が、PD 後の非アルコール性脂肪性肝疾患 (NAFLD)と関係していて、PD 後の残膵体積が 10ml 未満であることが、NAFLD 発生の危険因子であることを報告した。本研究では、術後膵管拡張の発生と残膵体積に注目して、膵空腸吻合を PWST に統一した PD 後の膵内外分泌機能を含む長期成績を評価し、また術後膵液瘻が残膵の形態に影響を与えるかどうかを検討した。</p> <p>対象は、2007 年 4 月から 2015 年 12 月に PD を施行し、術後 1 カ月目に CT volumetry で残膵体積を計測でき、かつ術後 6 カ月以上経過を追跡できた 187 例である。糖尿病の発症・増悪と術後膵管拡張の危険因子を評価した。また、血清アルブミン、コレステロール、アミラーゼ、HbA1c をマーカーとして用い、残膵体積と膵内外分泌機能の関係を評価した。</p> | | | |

血清アルブミン値は術後 1～36 カ月目、コレステロール値は術後 3、6、12 カ月目、アミラーゼ値は術後 1～24 カ月目で、large-volume group (LVG: 残膵体積 10ml 以上)と比較して、small-volume group (SVG: 残膵体積 10ml 未満)で低値であった。しかし、糖尿病の発症・増悪の頻度は、SVG と LVG で有意差を認めなかった。残膵の萎縮率は、SVG と LVG で有意差を認めず、両群とも 6 カ月で約 30%減少し、以後は変化を認めなかった。糖尿病の発症・増悪は 23% (n=43)で、その危険因子を単変量解析したところ、残膵体積 (SVG/LVG)は有意な危険因子ではなかった。多変量解析を行ったところ、術後膵管拡張 (p=0.019)と原疾患 (p=0.035)が、糖尿病の発症・増悪の独立した危険因子であった。予想に反して、術後膵液瘻と術後膵管拡張に有意な関係は認めなかった。

すなわち、術後早期に起こる膵液瘻は、後期に起こる術後膵管拡張に影響を及ぼさなかった。術後膵管拡張は、糖尿病の発症・増悪の最も重要な危険因子であり、また残膵体積の小さい症例は、膵内分泌機能よりむしろ膵外分泌機能が障害されるので、PD 後の経過観察においては、術後膵管拡張と残膵体積に注目する必要がある。

以上のように、本論文は膵空腸吻合を標準化した PD 後の膵内外分泌機能を含む長期成績を、術後膵管拡張や残膵体積といった残膵の形態学的変化に注目して評価し、PD 後の糖尿病の発症・増悪や術後膵管拡張に影響を与える因子を解析した論文であり、学術上極めて有益であり、学位論文として価値あるものと認めた。

Pancreatology. 2017; 17: 814-821.

Published: June 23, 2017

doi: 10.1016/j.pan.2017.06.008.

著者名

Yusuke Iizawa, Hiroyuki Kato, Masashi Kishiwada, Aoi Hayasaki, Akihiro Tanemura, Yasuhiro Murata, Yoshinori Azumi, Naohisa Kuriyama, Shugo Mizuno, Masanobu Usui, Hiroyuki Sakurai, Shuji Isaji